

ベーオウルフ

—古英詩訳—

大野 次征*

本論文は、西暦8世紀に書かれたとされている古英語の英雄叙事詩Beowulfを訳出したものである。底本としては、Fr. Klaeber, *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, edited with Introduction, Bibliography, Notes, Glossary, and Appendices (Boston: D.C. Heath and Company, 1922; third ed. with first and second Supplements, 1950)を用いた。本文は頭韻詩であるが、訳文は詩の体裁を取らず、また、口語訳につとめた。従来の訳では、例えば、under wolcnumを一律に「天が下」等と訳されているが、状況に応じて「雲の下」や「神の思し召しによって」など、文脈から訳出した。再度、ベーオウルフを読む機会があったのを（山口県立大、下笠教授と2年に亘る研究会）機に現代訳することにした。現存する最古の英語で書かれたこの叙事詩は全部で3、182行に及ぶが、紙面の都合上その一部の訳にとどめ、後は次号以降に継続の予定である。

序

1 聴け。過ぎし日の槍のデーン人¹、民の王たる
人々の偉大さを我らは聞き知った。貴人らがど
んなにその武勇の数々を成し遂げたかを。しば
しば、シェーフの子シュルドは敵の大軍から、数多
5 の民から蜜酒の席を奪い、兵士たちを震え上
がらせた。初めは貧しい身に見い出されたが、そ
後、王はその慰めを生きて経験し、神の思し召し
により²成長して名誉ある繁栄を遂げると、やが
10 て、鯨の道³の向こうから、四隣に住む諸国の民
が、従い来て、貢ぎ物を献ずるのであった。本当
に偉大な国王であった。やがて、館にその国王の
若き世継ぎ生まれた。神が民の慰めとして贈り遣
わしたのである。長い間、治める国王のいなか
15 た民が昔受けた塗炭の苦しみを神は知っておら
れたのだ。故に、命の主なる栄光の神が、この王に
この世の誉をお与えになった。シュルドの御子ベ
ーオウルフは⁴、音に聞え、デーン王国にその
声望は遍く広がった。かく、王子というものは、
20 父の庇護に存る時より、徳と惜しみなない財宝の下
賜により、成人となり戦争が起こると、腹心の家
来らが止まり援助するように心掛けるべきだ。ど
んな民にあっても立派な行いをなして人は栄えるも

25 ののである。さて、つわものシュルド王は寿命の時
が来て、主の御許へと立って行った。シュルデイ
ング人⁵の王、敬愛する国の統治者が言葉をまだ
使い、長い間、統べていたとき命じていた通り、彼
30 等腹心の家来ら王を海の浜辺に運んで行った。そ
の泊には環形 舳を持つ船、貴き人の船が氷に覆
われ出発の準備を整え停泊していた。それから、
慕わしい宝環を頒ち与えた君主は、船の懐に、高
35 名なる君は帆柱の傍らに安置された。そこには遠
い地方より取り寄せた多くの宝、装飾品が運び込
まれた。私は船がこのように美しく武器、甲冑、
剣、胴鎧に飾られたことを聞いたことがない。王
40 の胸には潮の勢いの中へと共に遥か遠くに旅立つ
多くの宝が置かれた。幼い頃初めて、ただ一人、
浪を越え送り出されて来たときに劣らず多くの宝
物を供えられた。更に、彼等は王の頭上高く錦の
45 旗を立てた。浪に王君を運ぶに任せ、海原にあず
けた。人々の胸は痛み、心は悲嘆に暮れた。誰が
その積み荷を受け取ったか、人々には、館の参議
50 にも、広大な国王の土地の勇士らにも皆目分から
ない。

第一節

当時、敬愛されていた国王シュルディング人のベー

* 宇部工業高等専門学校英語教室

オウルフは、長い間城市の民の間に誉高かった。その父君の国王は、すでにこの世より彼岸へと旅立っていたが、やがて、ペーオウルフに貴きヘアルフデネが生まれた。この君は、老いてなお武勇に秀で、命ある間栄えあるシュルディング人を治めた。この君に全部で4人の子供が生まれた。軍勢の指導者にヘオロガール、フロースガル、有能ハールガが生まれた。〈・・・〉⁶は、戦のシルフイニング人オネラの褥の伴侶たる妻になったという。やがて、フロースガルは戦いの成功、戦闘の栄光に恵まれ、家臣らの心服も得たが、若い兵士達も偉大な戦士の一団に育っていった。主君の心に一つ思い立つことがあった。人々に命じて人の子らがこれまで知り覚えもないほどの館を、壮大な蜜酒の館を建設させようと、その館で軍勢と人命を別にして、神が王に与えられた全てのものを、老若共に頒ち与えようとの思いが起こった。さて、主君が、この世の数多の民に労役を命じ、館を装飾したと言う話しは津々浦々まで聞こえ渡った。やがて、その館、比類ない館が人々の間に早くも完成の段となった。言葉で動かす力を普く持った君は、館をヘオロットと名づけた。主君は約束を違えず宝環、宝物を宴席で頒ち与えた。館は、高くそびえ破風造りであった。それも、激しい焰、憎むべき火の手が上がるのを待つこととなった。だが、不倶戴天の怨みによる義理の親子間の争いが起るのは、まだ先のことである。さて、恐れを知らぬ悪霊、暗闇に棲むものは、日毎館の中から高らかな歌声を耳にして苛立ち、耐え難い時を忍んでいた。豎琴の調べ、歌詠みの歌が聞こえてきたのだ。昔より、人類の起源を語り得る者は、語った。『全能の神は、大地を創り、海に囲まれた美しい大地を創り、勝利の神は太陽と月の光を地に住む者らの明りに据えた。大地の面を枝と葉とで装飾し、そして、また生きて動き廻る全てのものに命を創られた』と。そこで、武士たちは喜びと幸福の中で暮らしていたが、やがて、ある物の怪が、地獄の悪鬼が禍をなし始めた。その獐猛な悪霊、音に聞こえた辺境の跋涉者、沼沢と要がいとに棲む者は、グレンデルと呼ばれた。創造主がカインの末裔の中に追放された後、この呪われ者は、暫く妖怪族の巢に棲んでいた。永遠の主は、アベルを殺害した故にこの殺人に仕返しを罰を下したのだ。神はその敵意の仕打ちを喜ばず、主はその罪の故にカインを人類の中から遙か遠くへ追放された。そのカインよりあらゆる怪物が、巨人や妖精や怪獣、また神と長い間争ってきた巨人どもが生まれた。神は、彼等にその報復を下された。

第2節

夜になると、やがてグレンデルは、高殿の様子を、鎖鎧のデーン人らが、酒宴後どのように落ち着いているか見ようと出発した。すると、そこに家来の一団が宴の後眠っているのを見た。彼等は、自らの身の不運、悲劇を感知しなかったのである。獐猛、食欲な禍をもたらす生き物は、突如身構えた。狂暴、残忍なその生き物は、30人の家来を寝床より掴みとった。獲物に誇り、その場より住処に帰ろうと、数多の死体をくわえ、わがねぐらへと引き返すのであった。やがて、あさまだき東雲の時、グレンデルの戦の力が人々の間に隠れなきこととなった。宴の後、叫びの声、朝の深い嘆きが湧き起こった。彼等が、憎き悪霊の足跡を見たとき、かの音に聞こえた君、由緒ある家柄の貴人も悲しみ、座り込んだ。いと強き人は従士らを失った悲しみを耐え忍んでいた。この災難は、烈しさをきわめ、おぞましく、また長きに亘った。その後、長く時を置かず、早くも翌日、グレンデルは新たに、辛酸な殺戮を働かき、蛮行と悪行をなすにひるまなかつた。余りにも、執拗の仕業であった。さて、館の占拠者⁸が憎しみをあらわにし、しかと明瞭な記しを以って宣告した後、他所のもっと離れた所の小部屋に寝床を求め、家来を見出すことは容易なことであった。それ以来、敵から逃れる者は、一層遠く離れ、一層堅固にわが身を守った。このように、悪鬼は多勢を相手に一人思いのままになし、正義をもともせず闘い、やがて比類なき館は住む人も無くなった。その期間は長く続き、12年の歳月、シュルディング人の王は、怒りとあらゆる苦しみと尚も深い悲しみに堪えた。そのため、人々の間で、人の子らの中で、グレンデルがフロースガルに対し長期の間闘い、烈しい敵意、悪行狼藉を、絶えざる争いを多年に亘って仕掛けてきたことはよく知られ、悲しくも歌に歌われたのである。グレンデルは、デーン軍勢の何人とも和解を望まず、非業の行いを取り下げず、また贖罪金で決着を計ろうともしなかつた⁹。そこで、殺戮者の手から充分な償いをと考える理由をもつ賢者として誰もいなかった。この暗い死の影、悪霊は老若を問わず家来達を迫害し続け、待ち伏せては策略を弄した。霧立ちこめる沼地を常に暗黒の中を跋扈した。人には地獄の秘義に長けた悪鬼がどこを徘徊して廻るか分からない。このように、人類の敵、恐ろしい孤独の跋涉者は、数多の悪行、大きな損害とを加えること頻りであった。星のない夜夜、黄金で飾ったヘオロットの館を占拠するのであった。その敵も、玉座にも、財宝にも、神の意思により、近ず

170 けなかった。神の御心を理解もしなかったからで
ある。シュルディング朝の主君にとって、それは多
大の不幸、胸に迫る悲しみであった。高位の者が大
勢話し合いの席に着き、突然起った恐怖の出来事に
どう対処したが最善策かを審議すること頻りであっ
た。時には、彼等は異教の寺に生贄を奉納しま
175 すと誓をたて、邪教の神に、民の災厄から助けたま
えと、声を出して祈るのであった¹⁰。彼等、異教
徒の慣わし、祈願はそのようなものであった。心に
地獄を思い起こし、創造主を、人の所業を裁かれる
180 神を知らず、主なる神を知らず、天の守護者、栄光
の指導者を称える事は毫無かった。塗炭の苦しみ
にあって、火炎の広げた焰の手の中に命を捨て、救
いも考えず、心を変えようとせぬ者にわざわざいあ
185 れ。死んだ日の後も主を求め、父なる神の懷に安ら
ぎを望む者に幸いあれ。

第3節

このようにヘアルフデネ王の子息は、その時の悲し
みに思い煩わぬ時は、一時も無かった。また、さす
190 がの賢明な君も不運を良き方へ転じることでもでき
なかつた。民の上に降りかかったこの艱難、壮絶な
苦難、夜の間の最大の破壊行動は、余にも甚大で、
厭ましく、かつ長く続いた。イエーアト族の偉丈
195 夫ヒエラック王の従士は、遙か遠くその家にあつて
件のこと、グレンデルの行状を聞き知った。彼
は、それまで、当時の人のうちで断然力強く、品
位あり、偉大な人物であった。彼は、八重の潮路
を越える良い船を用意するよう命じ、あの国王
200 が、人の手を必要とされるから白鳥の道¹¹を越え
、戦の王、音に聞こえる国王を訪れようと、語つ
た。賢明な部下たちには、大事な人であるがその
船旅を取り止めるよう説得する者は誰もいなつ
かつた。むしろ、この勇猛の人を励まし、吉凶の
205 占をしてあげた。この者はイエーアト人の中から
見い出せる極めて勇猛な戦士たちを選びすぐつ
た。14人の従士と共に船へと向かい、戦士は、
この船旅に長けた者は、海岸へと一隊を率いて
行つた。時は、進み、船は波に漂い、崖の下に停
210 泊している。戦士達は、支度を整え、船首へ上
がった。一一潮は、渦巻き、波は浜辺へ打ちつ
ける。戦士らは、輝く武具、堂々たる鎧を船の
懷に運び入れる。男達は、鉄の輪で強く締め付け
215 た船を押し出す。勇士らは、待ち望んだ船路へ
と。やがて、舳先泡立つ船は鳥のように風に乗
り、海原を渡り、やがて、翌日到着の時刻、舳先
の反った船は、進み行くと船人らは、陸を認め

220 た。輝く海の崖、切り立つ山々、伸びた岬を見
た。そのとき、海原を渡った海路の終わりとなつ
た。それから、船から『嵐のイエーアト人』¹²の
225 兵士達は、平地に上がり船を繋ぎとめた。一一
鎖鎧、甲冑はがちがちと鳴った。船旅が、無事で
あつたことを神に感謝するのであつた。その頃、
230 岩の上より、切り立った崖の警護の任に就いてい
るシュルディング人の見張りが舳門を渡り、輝く
丸楯、立派な武具を運ぶのを見た。その者達が、
何者か知りたい気持ちに心うずくのであつた。そ
235 こで、兵士達のいる海辺の方へ馬にまたがり進ん
で行つた。フロースガルの家来は雄々しく大槍を
両手で振り回し、進み出ると礼節わきまえた言葉
で尋ねた。『あなた方は、鎖鎧に身を固め、こ
のように大船で潮路を越え、海原を渡って当地ま
240 で乗り付けてこられたのは、どこの武者であら
れるか。聞かれよ。私は、長いこと沿岸の警備を
務め、海の護りを行つて、デーンの地に敵は何人
も船団で侵入せぬようにしてきたものです。いま
245 だ、この地に楯持つ兵は、来たことはなく、ま
た、そちら方も、私共の部隊の許可も、身内の同
意を得た承諾は無いのを私は、知つておりま
す。私は、あなた方の御一人の甲冑をまとつた武
250 人ほど勇壮な人をこの世で見たこともない。その
人は、凛々しい武装の姿、一兵率ではありません
まい。ただ、その顔形、気高い容姿が裏切らない
限りだが。今、私は、あなた方が間諜として、こ
こより更にわがデーンの国土に進まれぬうち
255 に、素性を知らねばなりません。さあ、遠国の住
人らよ、海原の渡来者よ、私の詐らざる気持ち
をお聞き下さつたら、出自はどこか、速やかに教え
て頂くのが一番ですぞ。』

第4節

それに、領袖たる一行の長は、答えて口を開いた。
260 『我々は、イエーアト国の一族でヒエラック王の炉
辺にはべる者である。父は、諸国の民に知られ、気
高き王の名は、エッジセイオウと申した。長い歳月
を経て、やがて、父上は逝去された。この世の津々
265 浦々に到るまで賢人なら一人として父のことを覚え
ていないものはいない。我らは、友好のよしみよ
り、そなたの主君ヘアルフデネ公の御子息、民の守
護者を訪問に参つた。寛大なる取り計らいをたまわ
270 りたい。かの偉大なるデー王に大切な用件がある
のです。思うに、隠しだてがあつてはなりません
まい。私共が、伝え聞いた通りなら、シュルディング
の民の間に、どのような悪鬼かは分からぬが、世に

275 も不思議な略奪者が、暗闇の夜に、おぞましくも尋常ならぬ攻撃、被害、殺戮をおよぼしていることは、夙にご存じのはず。そのことについて賢帝にして名君のフロスガル王に、魔物を征伐する策の助言をお与え出来ると言うのが、私の心意気という
280 もの。王に事態の変化、災厄と苦難の救いが再び到来すれば――そのとき、あふれる悲しみも静まれよう。さもなければ、類なき館があの高台に立っている限り、今後も絶えず王は、悲哀の時を、悲嘆
285 とを耐え忍ばれる事になろう。』心猛き警備の役人は、馬にまたがったままこう語った。『物事をわきまえ、判断に敏なる戦士なら言葉と行動の2つの区別はつくものです。貴部隊が、シュルディング
290 王にとり、友好の一行とお認めいたします。剣をさげ、鎧をつけたまま先にお進み下さい、ご案内いたしましょう。また、若い兵士らに命じて敵から、貴船、岸辺のタール塗りの新船を立派に守らせましょ
295 う。舳先が上に反った木船が、『嵐のイエアート人』の国土へと再び將軍を乗せ八重の潮路を戻って行かれるまで。かの襲撃を無事にいきぬくことが、果敢に戦う皆さんに運命として与えられているのですぞ。』それから、一行は上陸して行った。船
300 は静かに停泊した。大船は、もやい網に繋がれ錨に固定され動かなかつた。兜の上には、黄金で飾った、火で鍛えて光る猪の像が輝いていた。土気そそる立て物は剛者の命を守るのだ。戦士らは、急ぎ足
305 で一団となり、行進するとやがて、黄金に輝く壮麗

な館が目止まった。それは、この世の館の中でも地上に住む人々の間で最も知られたもので、かの君主がその館に住んでいた。その輝きは四方の
310 国々に及んだ。さて、勇猛の士は、輝く館を一行の武士達に差し示し、そこへ真直ぐ進む道を教えた。戦士の中にいたその男は軍馬の鼻先をぐるりと戻すと、言葉を発した。『私の戻る時です。
315 全能の父の御加護で皆さんの任務が無事でありませうように。私は、海岸に戻り外敵の軍勢に備え警備をいたします。』

第5節

道は石で敷き詰められ、そこを兵士らは、隊を組んで進んでいった。強い手編みの鎖かたびらは、光り輝き、兵士らがものものしい武具を身につけ館の奥に入っていく時、輝く武具の鉄環は音を立て鳴り響いた。船旅に疲れた者達は、大楯や極めて堅固な丸楯を館の壁にたてかけると、長椅子に腰を下ろした。――鎖鎧、兵士らの武具は、鳴り渡り、海の男の武具たる槍は、灰色の穂先のトネリコ材の槍は
330 一所に立て置かれた。鉄の甲冑を身にまとった一隊は、武器を携えていた。その時、その場にいた威風堂々たる人物が、戦士らにその素性を尋ねた。『どこより、あなたがたは、飾り楯、灰色の鎖鎧、面頬
335 付兜、また数多の戦の槍を持って来られたのでしょうか。私は、フロスガル王の取り次ぎ役の者です。』

註

1 「槍のデーン人、民の王たる人々」 (=Gar-Dena, þeodcyninga) は、ヴァリエーションと呼ばれ、頭韻を踏む為、また物語の展開の便法として用いられる、両者は同一の人々。

2 拙論 *Under Wolcnum (Beowulf 8a and 1770 a)* 参照 (本年度、紀要化)。

3 「鯨の道」 (=hranrad) とは古英詩独特のケニングと言う表現法で「人や物を、その属性によって婉曲に示す複合語または句」である。鯨の道とは、「海」のこと。ケニングについてはくわしくは拙論『宇部高専研究報告』第40号 *Compound Nouns and Derivative Nouns in OE Poetry*, pp.43-52 参照。

4 主人公ベオウルフ (イエアート人) ではなくデーン人。

5 『シュルディング人』とはデーン人 (デンマーク

人) を指す。

6 < . . . > は脱落を示すが、原文にはその空白部分が見られないが、Klaeberによると、Maloneは、Yrseと言う女名をいれている。

7 『宴』 *wist* "plenty, provision, food, feast" の意味であるが、グレンデルがしでかした宴のこと。なお、Elliott Van Kirk Dobbie, *Beowulf and Judith, the Anglo-Saxon Poetic Records IV*. (New York: Columbia University Press, 1953), pp.122-23によると "Feasting" here used figuratively for "joy, good fortune." With this interpretation we have a clear antithesis between *wist* and *wop* "weeping, lamentation."

8 『館の占拠者』 グレンデルのこと。

9 『贖罪金で決着を計る』とは、グレンデルは法的に殺人の罪があり、お金で贖罪するのが義務であるが、相

手は怪獣のこと。

10 Klaeber, p.135の次の言葉を参照： Since Hroðgar is throughout depicted as a good Christian, the Danes' supplication to a heathen deity might conceivably indicate that in time of distress they returned to their former ways---as

was done repeatedly in England.

11 『白鳥の道』 *swanrad* "swan-road" = "sea"

12 『嵐のイエーアト人』 人名、部族の前にepithet (形容辞) を冠するのは、洋の東西を問わない。

ex. Richard the Lion-Hearted.

(平成8年9月24日受理)